

愛についてのキンゼイ・レポート

2005(平成17)年8月27日鑑賞(心齋橋パラダイスクエア)

★★★★



監督・脚本=ビル・コンドン/出演=リーアム・ニーソン/ローラ・リニー/クリス・オドネル/ピーター・サースガード/ティモシー・ハットン/ジョン・リスゴー/ティム・カリー/オリバー・プラット/ディラン・ベイカー/リン・レッドグレイブ(松竹配給/2004年アメリカ・ドイツ映画/118分)

……日本では1960年に出版された謝国権氏の『性生活の知恵』が一大センセーションを巻き起こしたが、アメリカでは一足早く1948年の『キンゼイ・レポート男性版』と1953年の『キンゼイ・レポート女性版』がそれ。350項目の質問による1万8千人へのインタビューとは、何ともしずいエネルギー……。それにしても、タマバチの研究から一転しての、人間のセックスヘアプローチした原動力は一体ナニ……？ キンゼイ・レポートの評価とともに、それがこの映画のテーマかも……？

タマバチの研究に没頭……

1894年生まれのアルフレッド・キンゼイ(リーアム・ニーソン)は、エンジニアで厳格一辺倒の父親アルフレッド・シークイン・キンゼイ(ジョン・リスゴー)への反発から、技術者ではなく科学者への道を定め、ボードン大学で生物学と心理学を学び、ハーバード大学で博士号を取得。そして1920年にインディアナ大学へ移り、動物学の助教授を務めながら、タマバチの研究に没頭した。「そんな研究をして一体何が面白いのだろう」と私には思えるが、世の中には現在の天皇家の人たち(?)も含めて、そういうことが好きな人がいるもの。そしてもちろんそれはそれで大切な研究だから、私としてもケチをつける気は毛頭なし。ところが何万・何十万ものタマバチを研究する中でキンゼイ教授がたどり着いたのは、「生物にはただ1つとして、同一のものはない」という真実。

そしてこれが、この後人間のセックスについての探究心に結びついていったの

だから面白いもの。

その当時の人間のセックスを支配していた基準は、「普通か、普通でないか」というものさしだけ。したがって何の科学的根拠もないまま、「普通は……」「正常なのは……」という基準に縛りつけられてきた人たちはかわいそうなもので、表面に表れないさまざまな性的な悩みや葛藤があったことは容易に想像できるはず……？

『性生活の知恵』と『キンゼイ・レポート』

日本では、謝国権氏が書き1960年に出版された『性生活の知恵』がベストセラーとなった。アメリカでは一足早く1948年出版された『キンゼイ・レポート男性版』がそれに相当するもの……？ この『キンゼイ・レポート男性版』は一大センセーションを巻き起こすとともに、キンゼイ博士はもてはやされ、一躍人気モノとなったが、5年後の『キンゼイ・レポート女性版』の方は……？

キンゼイ博士の学術的な探究心は、男性版でも女性版でも何ら変わらないはずだが……？ そして既に心臓病を抱えていたキンゼイ博士は1956年に62歳で死亡。まさにキンゼイ博士の生涯は、タマバチの研究と人間のセックス研究に捧げたものとなった……？

世の中には「記録マニア」の人種がいるが、このような人種が生涯をかけて1つのテーマについて学術的な調査・研究を続けることに十分な価値があることを、この映画を観て理解……。そのうち日本でも『性生活の知恵』の著者である謝国権氏を主人公にした、『性生活の知恵レポート』が映画化されるかも……？

350項目の質問と1万8000人のインタビューだが……

『キンゼイ・レポート』の基礎となったのは、1万8000人に対する「性の遍歴」についてのインタビュー。そして、そのインタビューを可能な限り客観化するために考案されたのが、350項目にのぼる質問事項。「初体験はいつ？」「夫（妻）以外の男性（女性）との性体験は？」「夫婦の性交渉の回数はいくつ？」など、当然その質問は具体的で、シンプルな回答が可能なものだが、その適切な実施が容易でないことは当然。何よりもまず、真実を答えているのか、それとも適当にウソを

交えながら回答しているのかの判定そのものが難しい。もちろん、キンゼイとワーデル・ポメロイ（クリス・オドネル）、クライド・マーティン（ピーター・サースガード）、ポール・ゲブハルト（ティモシー・ハットン）という3名の強力な助手を中心とするそのスタッフたちは、その困難性を前提としながら、ベストと思われるインタビュー方法を模索していったのだが、果たしてそのデータの学術的な価値は……？

昨今の性教育は……？

昨今、日本の話題を集めたテーマの1つとして、小学生や中学生向けの性教育問題がある。スライドや人形を使った(?)そのリアルな描写は内容的には科学的で的確なものらしいが、問題は果たしてそんな教育が必要なのか否かということ……？

キンゼイ博士が、インディアナ大学で結婚講座の講義を始めたのは1938年。日本ではあまり知られていないが、新大陸アメリカに渡ったイギリス人たちは、宗教的には敬虔なピューリタンが多かったため、性に関してはきわめて閉鎖的で保守的な価値観が強かった。そんな1938年から1940年代前半の時代に、大教室で教壇上のスクリーンに映し出されたものは……？

こりゃ当時としては画期的な問題提起であり、一大センセーションを巻き起こしたのは当然。これを大学の講座として認めたハーマン・ウェルズ学長（オリバー・プラット）の決断とロックフェラー財団の資金提供の決断は立派なものだと思うが、日本の昨今は……？

珍しいパンフと面白い情報

この映画のパンフレットは、文庫本サイズで80頁という珍しいスタイル。そしてその第2章には3本のコラムと2本のレビューが掲載されている。これらはそれぞれエラく難しいテーマを取りあげ、筆者なりの視点で分析して書かれたかなりの労作で、興味深いもの。さらに映画『愛についてのキンゼイ・レポート』公開にあたり「2005年日本人のセックスはどうなっているのか調査してみました」として、「20代から50代の女性1000人を、インターネットを通じて調査した」結

果が小冊子にまとめられている。それを見れば、当然とはいいいながらも、ビックリするようなデータが……？ さて、私としてはこれを参考に、どのような行動に出ればよいのやら……？

「セックス奉仕隊」とメール情報との区別は……？

パンフの中のコラムで特に珍しかったのは、キム・ミョンガン氏のコラム「現代日本の『性』事情 『せい』相談所所長キム・ミョンガンによるセックス・レポート」の中に書かれてある「セックス奉仕隊」の存在。そもそも「性人類学者」という種類の学者が存在することも知らなかったし、「セックス奉仕隊」が設立され、適正なテストを経て合格した男性たちが、悩める女性たちに対して無料で紹介されているということも私は知らなかった。そして何と、「この奉仕隊は恋人紹介ではなく、マッサージ、リハビリ、スポーツクラブのようなものである」とのこと。

他方、いわゆる「迷惑メール」と呼ばれる、洪水のようにまき散らされている「愛人紹介サイト」(?)も、最近は手口が巧妙化してきている。私のパソコンにも、いかがわしそうな団体名ではなく、個人の女性名で「お久しぶりです」などというタイトルで入っていると、これは誰だったかな、と思わずそのメールを開くことに……。最近多いのは、「セックス奉仕隊」とは逆のパターン。すなわち女性たちの互助組織(?)としてつくったクラブだから、男性は一切無料、そして「決して迷惑をかけません」式の勧誘の増加。これって、もしホントなら、オレも申し込みたいといつも考えているのだが……？

もし、1950年代に個人情報保護法が施行されていたら……？

日本では2003年5月23日に個人情報保護法が成立し、5月30日公布・一部施行(4～6章以外)、2005年4月1日全面施行された。この法律は、個人情報の有用性に配慮しつつ、個人の権利利益を保護することを目的としたものだが、その目的の実現は「言うは易く、行は難い」もの。とりわけ医療分野においては、10年以上前から進められてきた①インフォームドコンセントの推進、②カルテの公開などの動きと、個人情報の管理は、ある意味で矛盾・対立する難しい問題点。

個人情報保護法の制定とその施行に伴って、2004年4月2日「個人情報の保護に関する基本方針」が閣議決定された。そして医療分野については、①安全管理に関する問題、②自己情報のコントロールに関する問題、③死者の情報という特殊性から、

①2004年12月24日「医療・介護関係事業者における個人情報の適切な取扱いのためのガイドライン」

②2005年1月日本看護協会「看護記録および診療情報の取り扱いに関する指針」さらに

③2005年3月「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」

などが次々と策定され、医療関係者は現在その学習にてんやわんやという状況だ。

和歌山県立医科大学での個人情報保護法についての講演

私は2005年8月31日、和歌山県立医科大学で個人情報保護法について講演することになっており、既にそのレジュメや資料は送付済み。そんな中、個人情報保護法の観点から、8月27日に観たこの『愛についてのキンゼイ・レポート』を考えると、キンゼイ博士やそのスタッフたちが1万8000人からの聞き取り調査によって獲得した、セックス遍歴についての個人情報は、その取り扱いがきわめて難しいものであることは明らか。

この『キンゼイ・レポート』をテーマとして、キンゼイ博士の人生を映画化するにあたっては、インタビューを受けている何人かの姿がモロにスクリーン上に表現されている。しかしそれは、1950年代に個人情報保護法が施行されていれば、大問題になったはず……。

『キンゼイ・レポート』における性の調査に関するデータの価値は非常に高いものだが、今の時代においては、「個人情報保護」の観点からもこれを十分チェックしてみる必要があるのでは……？

2005(平成17)年8月29日記